

ゼミ生の問題提起が 閣議決定までに発展!

社会学部メディアコミュニケーション学科 「メディアコミュニケーション演習」(薬師寺克行ゼミ)

2年生を対象とするこのゼミは、新聞、テレビなどマスメディアの各分野について基本的知識を身につけるとともに、それぞれの分野が直面している問題などについてグループに分かれて研究し、論文作成を進めている。

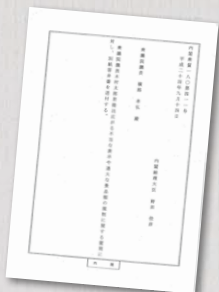
春学期、ゼミでは「現在のマスメディアが抱える課題についてグループごとに調査・発表する」という課題が与えられた。すると1つのグループが「ステルスマーケティング」を取り上げた。これがとんでもないことに発展していくことになった。

ステルスマーケティングとは、直訳すれば「隠れた市場操作」。芸能人が自分のブログで特定の商品をほめたり、飲食店について一般人を装って特定の業者が高い評価を投稿する行為を指している。問題なのはこうした行為に報酬が伴っていることだ。消費者にはそれらが分からない仕組みになっている。

問題を提起した安澤美穂さんは「法律を調べると法規制はあるものの、規制の対象は商品やサービスを供給する企業や店舗に限定され、報酬を受け取って宣伝活動をしている代行業者は対象外。消費者庁に問い合わせたのですが、曖昧な回答でした」と語る。

ではどうすべきなのか。議論の結果、ゼミ生たちは「国会議員に陳情して法改正を要求しよう」とい

閣議決定された陳情書。野田首相の名前が記されている



菅元首相を訪ねた際の記念写真。実は封筒の宛名を「菅直人」と間違えてしまったハプニングも…

う結論に達し、陳情書を作成した。元朝日新聞の政治部長である薬師寺教授の紹介で8月9日、民主党の菅直人元首相や自民党の谷垣禎一総裁、本学出身の木村太郎筆頭副幹事長ら5人の国会議員に会って陳情書を渡すことができた。その結果、9月5日に木村議員が自民党を代表して政府に「広がる不当な表示や過大な景品類の規制に関する質問主意書」を提出、これを受けて野田内閣は「法改正を検討しできるだけ早期に国会に提出する」という内容の答弁書を閣議決定し、9月14日に衆院に提出した。大学生の問題提起が政党を動かし、閣議決定にまで発展した画期的なことだった。

ゼミ生のひとり、國嶋泰史さんは「答弁そのものは、僕たちの要求にストレートに答えるものではなく、やや残念でした。でも、自分たちの陳情が国会で取り上げられたことで、政治との距離が近くなったと感じました」と話している。

薬師寺教授は「ゼミでの議論や実際の陳情、政治家との対話を通じて、自分たちが社会の中でもっている役割を自覚し、社会を動かし世の中をつくるのは一人ひとりの市民だということを実感してほしいと思っています。今回の経験はよい契機になったでしょう」と、学生達の積極的な姿勢を評価している。

机上の議論だけでなく、行動することで学びを深めるゼミでの体験は、学生たちのキャリア形成にも大いに役立つはずだ。

ニュービジネスを学ぶ、 日本初の授業!

国際地域学部国際観光学科 寄付講座「ペットツーリズム論」

近年、観光・旅行業界においてペット関連事業が新たなビジネスとして注目されている。統計によると、現在、日本国民の2/3が何らかのペットの飼育を志向。実際に飼育されている犬や猫の数は約2,500万にもものぼり、1兆円超の巨大市場となっているという。少子高齢化を背景に、ペットは家族同様の存在となりつつある。

ペットを飼育する一家にとっては、旅行の際、ペットをどうするかは大きな悩みどころだ。旅行中は預けるにしても、ペットホテルやペットシッターの存在が必要となり、同伴するにしてもそれが可能な宿泊施設や交通手段があるかどうかのポイントとなる。ペットの行きどころがなければ、旅行そのものを断念してしまうことにもなりかねない。そこで、大手ホテルチェーン、旅行代理店や航空会社などは「ペット同伴可能なツアー」や「ペット同伴可能な宿」などのサービスに参入し始めているのである。

しかし、需要に対してサービスの提供が追いついていないのが現状。さらにペット関連の法令が周知徹底されていないことや、ペットの生理・生態を理解したスタッフの配置が進んでいないことから、すでに提供されているサービスの中にも、適正とは言いえないものが多く散見されるという。たとえば、パーキングエリアに設置されたドッグラ



成田空港の表示にもペットホテルの案内が。各所にペット対応が追加されていることが分かる



東海林教授(写真右)が日本愛玩動物協会の講師の皆さんを紹介。同日の様子はテレビ東京「ワールドビジネスサテライト」でも紹介された

ン。犬連れの車の長旅に配慮したものだが、地面の硬さが考慮されていないために犬の肉球を傷つけたり、適当な広さが確保されていないために犬が走り回れないなどといったものが少なくない。市場拡大に伴い、飼い主(利用者)、ペット(動物)、事業者(観光業者)3者のwin-winの関係構築が急がれている。

本講座は、観光・旅行業界を志望する国際観光学科の学生を対象に、公益社団法人 日本愛玩動物協会の協力でスタートした。同協会の獣医師らがオムニバス方式で講義を担当し、ペットとの同伴宿泊ホテルやペット関連施設の計画・設計、管理運営、人と動物の関係学、動物の生理・生態や習性、動物関連法案などを学び、この分野で活躍できる人材の育成をめざす。

講座初日の9月25日は、60名ほどの学生が受講し、講座のコーディネートを担当する東海林克彦教授によるイントロダクションを興味深く聴き入った。観光業界への就職が内定している池田裕太さん(4年)は「今後、動いていくうえでペットに対するホスピタリティーが必ず必要になる」と思い、受講を決めたという。東海林教授は「観光業界におけるペットへの対応は広義のバリアフリーでもある。人と動物の関係をふまえたペットツーリズムを学び、新たなビジネスの創出にも幅広い好奇心を持って欲しい」と語る。日本初の注目の授業だ。